

## ルカによる福音書22章24-71節 「暗闇の時」

### 1A 最後の主の教え 24-34

1B 給仕する者 24-30

2B 信仰の試み 31-34

### 2A 最後の備え 35-46

1B 共におられなくなる主 35-38

2B 誘惑に対する祈り 39-46

### 3A 弟子たちとの別れ 47-65

1B 捕縛されるイエス 47-53

2B ペテロの否認 54-65

### 4A ユダヤ議会の判決 66-71

## 本文

ルカによる福音書 22 章 24 節から読んでいきます。私たちは前回、イエス様が再び戻って来られるまで一緒にすることのない、最後の食事について見て行きました。エジプトから出ていくことを覚える過越の食事において、イエス様は神の国で再び食事をする時までは、もはやあなた方と食事をするのではないとされて、その最後の食事を切に願っておられました。食事は親密であり、イエス様にとって仲間との会話ができる所です。そこでイエス様は、ご自身がまさに、過越の食事で食べるパンとぶどう酒であることを語られました。このパンは、あなたがたのために裂かれるパンであり、このぶどう酒は、新しい契約のために流されるわたしの血であると言われました。イエス様がむち打たれて裂かれる肉体が、そして十字架上でほとぼしり流れる血潮が、全人類を、そして世界をサタンの手から贖い出すいけにえとなるのです。

このような親密な会話がなされた後に、サタンが入り込んでいることを語られました。22 章の始まりに、「十二人の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。(3 節)」とあります。ルカによる福音書では、他の福音書以上に、主が十字架に向われるにあたって、そこでサタンによる力が現れることを強調しています。十字架への道は、霊の戦いそのものであったことを明らかにしています。最も近い 12 人の使徒たちから、裏切り者をサタンは起こすのです。これは激しい霊の戦いであり、葛藤です。イエス様は、最後の食事をしておられる時に、それが終わり前に、裏切り者がこの中にいることを明かされました。そして弟子たちの中で、だれが、そんなことをしようとしているのかと、互いに議論をし始めたのです。

### 1A 最後の主の教え 24-34

24 節は、その続きです。イエス様は、そのようなとてつもない霊の戦いが起こっていることに、全

く無頓着な弟子たちに対して、心を広くして、忍耐の限りをつくし、柔和に教え諭して行かれます。ヨハネの福音書 13 章 1 節には、「世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」とあります。ここの「最後」は「極みまで」と訳すこともできます。まるで何も分かっておらず、これからご自身を見捨てて散り散りになることも予め知っておられて、それでも、ご自分のことは無にされて、ご自分の者にされている弟子たちのことを考えてくださっている、イエス様の柔和なお姿を見ることができます。

#### 1B 給仕する者 24-30

24 また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった。

なんとも、子供じみた姿です。イエス様がこれからどれほどの苦しみを味わわれるのか、その話をしておられたのに、裏切る者がいるという話をされていたのに、だれが一番偉いのだろうか？という幼稚な議論をしていました。しかし、イエス様はこのような姿を見ておられて、深く慈しみ、憐れんでおられたのだと思います。

だれが一番偉いのか？なんて、イエス様が偉いに決まっています。イエス様が主であられて、ここの主人公です。ところが、イエス様がピリポ・カイサリアでご自身がキリストであることを弟子たちに示し始めてから、彼らは何度となく、だれが一番偉いのだろうかという議論をしていました。主がエルサレムに入られたら、ローマを倒してイスラエルの王となられることを彼らは信じていたからです。その側近になるのは誰なのか？という議論をしていたのです。こういったことは、世の中では当たり前に行われています。けれども、キリスト教会においても、だれが一番偉いのか？という愚かな議論が起こることが現実にあります。だからこそ、弟子たちは、福音書の中に、自分たちの失敗も赤裸々に描き、キリストにあってへりくだって歩むことを教えていかれたのだと思います。

25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々に対し権威を持つ者は守護者と呼ばれています。26 しかし、あなたがたは、そうであってははいけません。あなたがたの間で一番偉い人は、一番若い者のようにになりなさい。上に立つ人は、給仕する者のようにになりなさい。27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています。

「異邦人の王たち」と言われていますが、それは神を知らない人々ということです。すぐ後に彼らがイスラエルの十二部族を治めることを語られますが、イスラエルの神に仕えている者たちはそうであってはならない、ということを強調されています。そして当時の王たちや守護者と呼ばれている者たちは、今、私たちの考えている以上に、権力をふるまっていました。けれども、イエス様は真逆を教えられました。一番若い者のように、給仕する者のようにになりなさいと教えられます。

というのも、イエス様ご自身が、給仕する者のように振る舞われていました。ヨハネ 13 章には、この最後の食事の時に、イエス様が弟子たちの足を洗っておられた場面が出てきます。足を洗うのは、しもべのすることです。使徒たちは、手紙の中でそのように教え、実践していました。例えばヨハネは、十二使徒の中で唯一、殉教せずに生き残った人でした。紀元後 90 年代に、福音書、手紙、そして黙示録を書き記しましたが、黙示録 1 章 9 節で、こう言っています。「私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり…」同じ兄弟であり、そして共に苦しみと忍耐にあずかっている。そして共に御国にあずかっているのだ、として、祭り上げられてもおかしくないのに、他の兄弟たちと一つになっていました。

28 あなたがたは、わたしの様々な試練の時に、一緒に踏みとどまってくれた人たちです。29 わたしの父がわたしに王権を委ねてくださったように、わたしもあなたがたに王権を委ねます。30 そうしてあなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めるのです。

ここに、イエス様が本当に弟子たちに感謝し、ねぎらっておられるのを見ます。「わたしの様々な試練の時に、一緒に踏みとどまってくれた」と言われています。主は、苦しみを経てから、栄光に入れられます。そして、父なる神は王権をイエス様に委ねてくださいました。詩篇第二篇などに、父が御子に、「2:8 わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。」と約束しておられます。それと同じように、使徒たちにも王権を委ねると約束されているのです。主が再臨して、地上の神の国で王として君臨される時に、使徒たちは、回復したイスラエル十二部族を治めることになります。そして、「わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし」とあります。王と親しい関係を持ち、王の恵みにあずかって、それで治めるのです。これは、教会に対する約束でもあり、ラオディキアの教会に対して、共に食事をすると約束された後で、「3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。」と言われています。また、ティアティラの教会には、「2:26 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」と言われました。

## 2B 信仰の試み 31-34

31 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」33 シモンはイエスに言った。「主よ。あなたとご一緒なら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」34 しかし、イエスは言われた。「ペテロ、あなたに言うておきます。今日、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

イエス様は、霊の戦いについて、残された弟子たちにも語っておられます。イスカリオテのユダにサタンが入りました。午前礼拝で詳しくお話しましたので、ぜひ聞いてください。今度は、サタンは、

ペテロを始めとして、麦のようにふるいにかけます。今、だれが一番偉いのかという議論をしていたのですが、サタンは、そういった時に自分のために人々を引きずり込むことができます。サタンは高ぶって墮落しました。同じように、自分を高くしようとする者を滅びへと引きずり込もうとします。

しかし、主は執り成してくださっていました。サタンの攻撃で最も恐ろしいのは、「信仰をなくす」ということです。罪を犯して失敗してしまうことは、それは主の心に痛みをもたらします。しかし、罪のために、すべての罪のために、御子のいのちさえ押しまらずにお与えになる御父の慈愛です。主の愛はそれだけ懐が広いのです。その愛に私たちは触れました。最も恐ろしいことは、自分自身を責めて、もうキリスト者としてやっていけないとしてあきらめることです。自分の犯した罪に圧倒されて、もうキリスト者としてやっていけないと思うことです。聖霊は、私たちの罪を自覚させますが、必ず十字架につけられたキリストを見せて、神の憐れみの中に連れて行きます。しかし、サタンは、罪をことさらに責め立てて、もう赦されないのだ、神の恵みにあずかる資格はないのだとして、キリストにある神の憐れみから引き離します。

ペテロは、「あなたは立ち直ったら」という、イエス様の憐れみに満ちた言葉を否定しました。立ち直るなんて、そもそも自分が倒れないということです。私たちにとって危険なのは、「私は大丈夫ですよ」という言葉です。パウロは、コリント人への手紙第一 10 章 12 節で、「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」と言いました。そして世にある試練について話しています。

## **2A 最後の備え 35-46**

### **1B 共におられなくなる主 35-38**

35 それから、イエスは弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も袋も履き物も持たせずに遣わしたとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは、「いいえ、何もありませんでした」と答えた。36 すると言われた。「しかし今は、財布のある者は財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない者は上着を売って剣を買いなさい。37 あなたがたに言いますが、『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです。」

イエス様がここで、言われているのは基本的に、「わたしはここから離れるから、わたしがあなたがたと共にいたときのような、備えや守りはなくなる。」ということです。ルカ 10 章で、72 人の弟子たちが、収穫のための働き人として遣わされる場面が出てきます。財布も袋も持たずに、出て行かせました。福音を宣べ伝えるために遣わされる時に、イエス様はそのようにされていたのです。それはちょうど、イスラエルの民が荒野の旅の時に、朝ごとにマナが与えられ、また 40 年間も荒野に留まっていたのに、着物も履き物もすり切れなかったという奇跡があったのと似ています。ヨシュアたちがヨルダン川を渡って、その地の産物を食べたなら、マナが降りるのも終わりました。

ここでも同じように、イエス様が地上におられる間、弟子たちに与えられていた特別な守りと備えだったのです。ヨハネによる福音書を見ると、イエス様は何度となく、「ヨハ 13:36 わたしが行くところに、あなたは今ついてくることができません。」と言われていました。もういなくなるので、今、与えられている常識を使って、自分たちの生活を守らなければいけないということです。ここに、「剣を買いなさい」という言葉がありますが、今の日本の治安のよい社会を考えたら理解ができなくなります。盗賊もたくさんいるような不安定な状況でした。ですから、今の言い方に変えたら、「きちんと、防犯ベルも設置して、鍵もかけていなさい。」と言っているような感じです。

そしてイエス様は、「『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。」というイザヤ書 53 章にある、キリストが罪ある者として裁かれる預言を引用されています。それはもちろん、イエス様が不法の者として数えられることによって、私たちの罪が赦されるためでありました。このようにして、神の定めによって、暗闇の力が押し迫ることが許されたのです。それゆえに、主は弟子たちのことを思いやり、その暗闇の時であっても、彼らが実際的なことでも守られるように指示をお与えになりました。

38 彼らが、「主よ、ご覧ください。ここに剣が二本あります」と言うと、イエスは、「それで十分」と答えられた。

弟子たちは、イエス様が「剣を買いなさい」と言われたことを、間違っ受けてとめました。それは、万が一、私たちの主に危害が加えられるようなことがあるならば、私たちは主のために勇敢に戦う、抵抗する、ということです。イエス様は、「それで十分」と言われていますが、それは「もう良い、この話は終わりだ」という意味です。イエス様は総督ピラトの前で尋問に答えられた時に、「ヨハ 18:36 わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」と言われます。イエス様は、これからご自身を捕えに来る者たちは、父なる神の定めによるもので、また預言されていることで、それを実現するために動かなければいけないと決めておられたのです。

けれども、弟子たちはこうした霊的状況が何も分かっていませんでした。しばしば教会においても、彼らの無知と同じ過ちを犯してしまいます。「エペ 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天井にいるもろもろの悪霊に対するものです」と言われているのに、この状況を何とかしなければいけないとして、物理的に解決しようとします。まるで剣をもって戦うかのようなことをしてしまうのです。

## 2B 誘惑に対する祈り 39-46

39 それからイエスは出て行き、いつものようにオリーブ山に行かれた。弟子たちもイエスに従っ



た。40 いつもの場所に来ると、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。

ここでイエス様と弟子たちは、過越の食事の席を外しました。今、エルサレムの旧市街に行きますと、南西のところに、チェナクルム(屋上の間)と呼ばれているところがあります。今の建物は十字軍時代に建てられたものですが、その土台になっているところがローマ時代のものであり、かつてそこには、代々、ユダヤ人の信者たちが集まって礼拝を献げていました。その場から出て行って、東に向かい、キデロン谷を渡って、オリーブ山に行きました。そして、「いつもの場所に来ると」とあります。いつも、イエス様は十二弟子たちとだけの時間を過ごすために集まっていたところがあります。そのため、イスカリオテのユダは人目に触れずに、イエスを捕縛するのによい場所として、祭司長らに秘かに伝えることとなります(ヨハネ 18:1-2)。

イエス様は、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われました。主は、ご自身のこと以上に、弟子たちのことを気にしておられました。サタンが彼らを麦のように篩に掛けます。それは、誘惑という形でやってきます。しかし祈りが、誘惑の屈することのない力を与えます。

イエス様は、弟子たちに、「私たちが試みにあわせないでください。」と祈りなさいと命じられていました(11:4)。祈りによって、なぜ強められるのか？それは、次のイエス様ご自身の祈りに表れています。「自分自身に頼らず、父なる神に頼るようになるから」であります。祈りとは、自分の心と思いを神ご自身に任せることです。ですから、私たちが祈るのを怠ってしまうのは、自分の力、自分の知恵、自分の肉で動くのが自然だからです。しかし、神によって、神の御霊によって、神の知恵と力によって生きるには、自分の意志を神に従わせる必要があります。そのことによって、自分の肉ではなく、神の御霊が働いてくださり、それで悪魔の誘惑に打ち勝つことができます。ヤコブは、とても単純にこのように勧めました。「4:7 ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」

41 そして、ご自分は弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き、ひざまずいて祈られた。42 「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」

イエス様ご自身の祈りをここで鮮やかに見ることができます。まず、「弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き」とあります。主は、宣教の働きをされている時も、しばしば、弟子たちから離れてでも退かれて、祈られていました(マルコ6:45-46)。「石を投げて届くほど」とありますが、この表現は創世記に、ハガルが、息子イシュマエルが死ぬのを見たくない時に、「弓で届くぐらい離れた向こうに行って座った(創 21:16)」とあり、主が父なる神と独りになりたい思いが伝わってきます。私たちは、共に祈るのも重要ですし、そして、独りで神に向かう時間も重要です。

それから、「ひざまずいて祈られた」とあります。これは、へりくだって嘆願している姿です。使徒パウロも、エペソからの長老たちと最後に会い、また二度と会えないだろう、エルサレムに行って死ぬ覚悟であることを告げた時に、皆が声をあげて泣いたとありますが、そこで、「パウロは皆とともに、ひざまずいて祈った。」とあります(使 20:36)。

そして祈られた祈りが、まず、「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。」であります。主が神のことを、「父よ」と呼ばれているのが、次の「杯」の意味を知る手がかりとなります。主が十字架に付けられている時に、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになっただのですか」と祈られています(マルコ 15:34)。イエス様に対して、神は「これはわたしの愛する子」と言われていたのに、この子を見捨てなければいけない決断を神はしておられたのです。なぜ、見捨てられるのか？イザヤ 53 章にあるように、私たちの背きの罪のためです。つまり、私たちの身代わりのためです。私たちが罪ある者なのに、キリストが罪とされ、キリストが正しい方なのに、私たちが代わりに義とされます。イエス様は、神が罪に対して御怒りを示し、罪ある者をご自身から引き離すことを、十字架に付けられたイエス様にあって行われました。主がなぜ悶え苦しんでいるかと言えば、永遠の昔から父のふところにおられた神であられる方が、引き離されるからです。

しかし、「わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」と祈られています。これが先ほど話した、「神に服従する」ことです。父なる神に拠り頼むことです。自分の意志を退けて、父なる神の意志に全て任せることです。御心という言葉は、しばしばキリスト者の中で「占い」であるかのように濫用されています。「この人は、御心の相手かしら」と、若い女性が素敵な男の人を見たらときめくような感じの「御心」です。いいえ、御心というのは、既に明らかにされている神の意志であり、祈りとは、その意志に自分を合わせていく作業です。自分の願いを退けて、既にはっきりしている神の願いや思い、意志に合わせることです。

43 [すると、御使いが天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。]

御使いがイエス様の戦う祈りを助けています。ここから、これは霊の戦いであることがわかります。ダニエル書を読むと、神に仕える御使いと、墮落した天使たちが戦っている姿を見ることができます。ダニエルが祈って、御使いが幻を与えるまでに 21 日かかったのですが、それは墮落した天使が妨げていたからです(ダニエル 10:13)。非常に意味深な一言が、ルカ 4 章 13 節にあります。イエス様が四十日、断食をされた後に、悪魔がイエス様を荒野で試みしました。そして、「悪魔は試みを終えると、しばらくの間イエスから離れた。」とあるのです。しばらくの間、であります。今、苦しみ悶える祈りをささげておられる時に、確かに悪魔はイエス様を試みていたことでしょう。その祈りによって、汗が流れ、なんと血の混じった汗になりました。霊的にも激しい祈りとなり、それが肉体に極度の疲労をもたしています。そのような時に、御使いが助けています。マルコ 1 章による

と、イエス様が荒野での誘惑を受けられた後に、「御使いたちが仕えていた。(13 節)」とあります。

45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに行ってご覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46 そこで、彼らに言われた。「どうして眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい。」

弟子たちがなぜ眠り込んでいたのか、それが怠け心のゆえに祈らずに眠ったのではなく、「悲しみの果てに」とあります。今の事態を把握していませんでしたが、イエス様がこれで最後の食事であると言われ、さらに食事の席で裏切る者がいると言われ、ペテロが三度、主を知らないと言うと主が言われて、そして、不法の者に数えられるというイザヤ書の預言を引用されて、彼らの心は悲しみで一杯になったのです。悲しみに悲しんだら、それが落ち込みに変わり、そのまま眠ってしまいました。これが感情のなせる業です。

しかし、イエス様は、「誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい。」と言われました。私たちは主にあって奮い立ち、霊的に目を覚ます必要があります。感情に任せていれば、状況がどんどん悪くなる一方です。しかし、そこで「これではいけない」として、主にあって奮い立ち、そして、主を求め続ければ、そこで神の御霊が、見えていないものを見せてくださり、従わなければいけないことを教えてくださり、霊的に覚醒できるのです。

### **3A 弟子たちとの別れ 47-65**

#### **1B 捕縛されるイエス 47-53**

47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、群衆がやって来た。十二人の一人で、ユダという者が先頭に立っていた。ユダはイエスに口づけしようとして近づいた。48 しかし、イエスは彼に言われた。「ユダ、あなたは口づけで人の子を裏切るのか。」

他の福音書にて、ユダは、自分が口づけする者がイエスであると打ち合わせしていました(マタ 26:29)。口づけというのは、ほとんどは男女の間だけのもの、あるいは幼少の息子また娘に親が口づけするというものだけになっていますが、中東や他の多くの地域では、今でも親愛な挨拶として、行われます。。ですから、ここで親愛な行為を示す口づけを使って、裏切ったのです。これは、まさに「愛しています！」と言って抱きしめて、実はナイフを持っていて、背中を刺すような行為です。

49 イエスの周りにいた者たちは、事の成り行きを見て、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。50 そして、そのうちの一人が大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。51 するとイエスは、「やめなさい。そこまでにしなさい」と言われた。そして、耳にさわって彼を癒やされた。

先ほど話しましたように、これは霊の戦いなのに、彼らは周りに剣や棒を持っている群衆を見た



ので、血肉の戦いとしてみなしました。弟子たちの中でも、何でも率先して動くのがペテロでしたね。ヨハネの福音書では、ここで大祭司のしもべに切りかかっているのが、ペテロであることが書かれています。しかし、主が「やめなさい。そこまでにしなさい」と戒められました。そして、これまでと全く同じように仕えておられることに注目してください。なんと、「耳にさわって彼を癒やされた」とあります。ここで完全に、彼らの考えていることは、イエス様の考えと真逆であります。主は、敵をも愛し、敵をも祝福するために来られたのです。病の者を直されるために来られました。

52 それからイエスは、押しかけて来た祭司長たち、宮の守衛長たち、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って出て来たのですか。53 わたしが毎日、宮で一緒にいる間、あなたがたはわたしに手をかけませんでした。しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」

ルカは、この群衆を動かしている、祭司長と守衛長、長老たちに対して語られました。まるで暴徒の首謀者であるかのように、剣や棒を持ってくるが、わたしは、宮の中で教えていて、あなたがたは手をかけなかったではないか？とされています。つまり、彼らはイエス様がそのような人ではないことを、よく知っているのです。それにも拘らず、なぜそのような捕まえ方をしているのか？という、実は彼らの背後に「暗闇の力」が働いているからです。つまり、サタンはイスカリオテのユダの中に入り、裏切りを仕向けました。そして、ペテロなど弟子たちをふるいに掛けています。そして今、これら祭司長、守衛長、長老たちの企みにおいて働いています。イエス様がじっくりと見ておられたのは、その背後にいるサタンだったのです。

イエス様は、ご自身を殺したいと願っていたユダヤ人たちに対して、こう言われました。「ヨハ 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。」あらゆる憎しみ、人を殺したいと願う憎しみの背後には、悪魔がいます。さらに、同じように神によって生まれた兄弟に対する憎しみは、さらに悪いです。ヨハネ第一には、そのような憎しみは、悪魔から生まれているからだということが書かれています。さらに、最も酷いのは、神の御子ご自身に対する憎しみと殺意です。それがここです、暗闇の力が働いています。

## 2B ペテロの否認 54-65

54 彼らはイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペテロは遠く離れてついて行った。55 人々が中庭の真ん中に火をたいて、座り込んでいたので、ペテロも中に交じって腰を下ろした。

お分かりになるでしょうか、ペテロは確かに、この場面においても、他の弟子たちよりも率先して前に出ていくことに長けています。しかし、先にペテロは、「22:33 あなたとご一緒なら、牢であろう

と、死であろうと、覚悟はできております。」と言っていたのです。しかし、はっきりしなればいけないのは、それは彼の強い意志であったけれども、肉の力だったということです。私たちはペテロのように、強い意志によって私はこれをやります、と言い張ります。そして、イエス様の命じられていることを行っているかのように見えます。けれども、実は見せかけであり、ここでその偽りは明らかにされてしまうのです。ペテロは、「遠く離れてついて行った」とあります。ついて行っているから、ご一緒していると思いきませいたかもしれませんが、すでに一緒ではなかったのです。自分をごまかしている、偽っているのです。それが、「ペテロも中に交じって腰を下ろした」というところで、さらに明らかになります。イエスに敵対している人々の真ん中で、暖を取っていたのです。自分は、イエス様と一緒にだと思っていたけれども、すでに敵の中にいたのです。

56 すると、ある召使いの女が、明かりの近くに座っているペテロを目にし、じっと見つめて言った。「この人も、イエスと一緒にいました。」57 しかし、ペテロはそれを否定して、「いや、私はその人を知らない」と言った。

牢でも、死でも、ご一緒すると言っていたペテロは、召使いの女のことばで、既に偽っています。

58 しばらくして、ほかの男が彼を見て言った。「あなたも彼らの仲間だ。」しかし、ペテロは「いや、違う」と言った。

「しばらくして」と言っていますから、もう自分が先に否定したことが意識の中にないかもかもしれません。その時に、再び「彼らの仲間だ」と聞かれます。私たちは、誘惑に対して自分は抵抗できると思っていますが、もう負けているのに、それでもなおのこと抵抗していると偽ります。そして、「いや、違う」といって、先ほどよりもっと強い否定となっています。

59 それから一時間ほどたつと、また別の男が強く主張した。「確かにこの人も彼と一緒にだった。ガリラヤ人だから。」60 しかしペテロは、「あなたの言っていることは分からない」と言った。するとすぐ、彼がまだ話しているうちに、鶏が鳴いた。

「一時間ほどたつと」といって、さらに間を置いています。ですから、自分の犯した過ちが、心の中ではさらに熟成して、罪となっています。私たちは、一度、罪を犯すと、次に罪をもっと犯しやすくなり、そして罪を犯すと、次は強い意志をもって、意図的に犯すようになってしまいます。良心が麻痺してしまうのです。この男はかなり強く主張していますが、ペテロの言葉にガリラヤの訛があったからです。ペテロは、ここで最も強い否定、「あなたの言っていることは分からない」としました。そして、イエス様の予告通りに、鶏が鳴きました。

イエス様はかつて弟子たちに語られました、「12:8-9 あなたがたに言います。だれでも人々の前

でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」こういう罪を、ペテロは犯したのです。つまり、天の御国において、イエス様が御使いたちの前で、ペテロは知らないと言われるような罪だったのです。しかし、ペテロは憐れみを受けます。私たちも、一つの罪でその罪が天に入るのを妨げるのです。しかし、憐れみを受けます。

61 主は振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われた主のことばを思い出した。62 そして、外に出て行って、激しく泣いた。

主がペテロを見つめられました。公判が終わって、他のところに動かされた時に近づいたのでしよう。この時のまなざしは、「ペテロ。お前は、わたしを否んだ。だから、わたしもあなたを否む。」というものでしたでしょうか？いいえ、「ペテロ。わたしは、あなたの信仰が無くならないように、祈りました。はやく立ち直って、兄弟たちをカづけてやりなさい。」というものでした。

そして、ペテロはそのまなざしで、「主のことばを思い出した」とあります。人が悔い改める時に、ことさらに責め立てられて悔い改めるわけではありません。そのまなざし一つ、慈しみ深さによって悔い改めに導かれます。「激しく泣いた」とあります。イスカリオテのユダは、他の福音書では後悔して、そして自殺までします。しかしペテロは、イエス様の執り成しがありました。信仰も捨ててしまうのではないかとと思われるほど、自分を責めたことでしょう。しかし、その執り成しによって捨てずに済んだのです。

ここの章を学んでいて、「もし弟子たちが、きちんと祈っていたら、ペテロは最後まで一緒にいて、共に十字架に付けられたのだろうか？」と悩みました。弟子たちの頑張りが足りなかった、きちんと祈れていなかったから、ペテロは主を否んだのだろうか？それは、間違った解釈だと気付きました。イエス様は、初めからペテロが失敗すること、他の弟子たちが失敗することを織り込み済みだったのです。十字架への道は、主ご自身しかできない業です。もし弟子たちができるのであれば、イエス様は十字架に付けられる必要はなかったのです。弟子たちが知ったのは、次の事でした。「ガラ 2:21 もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」イエス様の十字架の道は、だれも一緒にすることはできない、イエス様お独りでしか行けないものだったのだ。だからこそ、この方の死のみによって、初めて私たちは救われるのだということ。自分の頑張りではなく、ただ神の恵みによってのみ救われるのです。

63 さて、イエスを監視していた者たちは、イエスをからかい、むちでたたいた。64 そして目隠しをして、「当ててみろ、おまえを打ったのはだれだ」と聞いた。65 また、ほかにも多くの冒瀆のことばをイエスに浴びせた。

イエスは、目隠しをされて打られました。私たちには反射的に、障害物を避けるように造られています。例えば、ボクシングの選手は、あれだけ叩かれても何とかなるのは、パンチを加えられる瞬間に、それに合わせて反射的に動いているからです。けれども、目隠しをされているとき、人間にそなえられた機能が働かなくなります。イザヤによると、イエスの顔だちは、「損なわれて人のようではな」なくなっていました(52:14)。そして、「冒瀆のことばをイエスに浴びせた」とあります。物理的に打たれることよりも、もっと心が折れるかもしれませ。言葉には力があります。

#### **4A ユダヤ議会の判決 66-71**

66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まり、イエスを彼らの最高法院に連れ出して、こう言った。67 「おまえがキリストなら、そうだと言え。」しかしイエスは言われた。「わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょう。68 わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。69 だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」70 彼らはみな言った。「では、おまえは神の子なのか。」イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの言うとおり、わたしはそれです。」71 そこで彼らは「どうして、これ以上証言が必要だろうか。私たち自身が彼の口から聞いたのだ」と言った。

他の福音書にも同じようなやり取りがあるので、同じものだと思ってしまうのですが、実は違います。「イエスを彼らの最高法院に連れ出して」とあります。しかも、「夜が明けると」とあります。マタイ、マルコは、夜の時にカヤパの家でこれに似た言葉のやり取りがありました。そして、カヤパが死刑だという判断を下しました。ところが、それは正式な最高法院、サンヘドリンでの判決ではなかったのです。まずもって夜に裁判をするなど、彼らの掟の中でやってはいけないとされていました。ですから、ここで夜が明けてから、正式に法廷を開き、それで死刑に決めました。

彼らは、イエス様について信じるか、そうでないか？ではなく、信じないと決めてしまっていました。それでも、イエス様は、ご自身がキリストであることを認め、神の右の座に着くと言われています。詩篇 110 篇 1 節にあるキリストの預言に書かれています。それから、「神の子」とも答えておられます。これは、詩篇 2 篇、「わたしがあなたを生んだ」とある預言、イザヤ 9 章にある、「ひとりの子が、私たちに与えられる。」という預言にもあり、キリストが神の子であることも書かれています。主が死なれたのは、明確に、神の子であるから、キリストであるからということでありました。神の子、キリストが死なれたから、全人類の罪を赦すことができます。イスラエルから遠くにおいて、後の世に生まれた私たちにも、罪から救う力があるのです。